「かんなわ」湯けむりの里

松岡　謙一郎

地獄
　玖倍理湯の井
　来往者の見た地獄
　　貝原益軒『豊国紀行』元禄七（一六九四）年
　　古川古松軒『西遊雑記』天明三（一七八三）年
　　脇蘭室『菡海漁談』寛政七（一七九五）年
　　蝶亭起友『温泉めぐり』弘化二（一八四五）年
　地獄と地獄めぐり
鉄輪の地名―地名の変遷
温泉
　鉄輪蒸窖及び両温泉分析並医療効果抜粋
　　（明治二十一年出版）
　蒸し湯
　渋の湯
　滝湯
　熱の湯
　その他
地獄蒸し
　地獄蒸し料理
　地獄釜
湯宿
　かしま（貸間）
　旅館
史跡
　温泉山永福寺
湯けむり景観

※参考文献

『別府市誌』（昭和八年八月・昭和四十八年八月・昭和六十年三月）
『別府温泉史』（昭和三十八年二月）
『別府史談』（四号・五号・七号・八号・十一号・十三号・十五号）
『湯けむりの里　鉄輪スケッチ』（昭和六一年六月）
『ゆけむり散歩』（各号）他

地獄

玖倍理湯井

此の湯の井は郡の西の河直山の東の岸に在り。口の径は丈余。湯の色は黒。湟常は流れず。人竊に井の辺に到りて。発声大言。驚き鳴りて湧き騰がること。二丈余許。其の気熾熱。向昵べからず。縁辺の草木。悉皆枯れ萎む。因りて慍湯の井と曰う。俗語に玖倍理湯の井と曰う。（豊後風土記・七一三年諸国に編纂を命ず）

《江戸時代の地獄見物記》

豊国紀行（貝原益軒・元禄七（一六九四）年）

鉄輪は別府の北一里餘りにあり。実相寺より猶北なり。熱泉所々に多し。民俗是を地獄と称す。熱湯の上にかまえたる風呂あり。病者是に入りて乾浴す。又其邊に湯の川あり。瀧あり。瀧の高さ二間半計。病人是に打たれて浴す。その西の山際所々に地獄と称する處多し。鬼山と称するは古き穴ありて下り見る。其穴の底熱湯わく事其音恰も雷の響きの如し。其西の山際に海の地獄とて池あり。熱湯なり。廣さは一段ばかり上の池よりわき出づ。上の池方六間ばかり。其邊岩の色赤し。岩の間によりわき出づを見る者おそる。先年、里人妻其夫といさかひて大いにいかりしが、此熱湯に身をなげるに、頓て身はただれさけて、其髪ばかり浮び出。豊後風土記曰、速見郡赤湯泉　此湯泉之穴　郡之西北有竈門山　その周一五丈許湯色赤泥土有　と書けり。即此海地獄の事なるべし。

此鉄輪村の西の方にも熱湯多し。〔又其西鶴見村の野に園内坊地獄とて熱湯あり〕泥湯なり。佐田へ行道の傍より近し。池の廣さ方六間ばかり、其内に湯の沸出る所三所あり。其湧き上る事皆三尺餘あり。是またおそるべし。豊後風土記に曰、速見郡玖倍理ノ湯井郡の西にあり。湯の色黒く泥土常に不流。人竊に井邊に到発声大言、驚キ鳴キ湧キ騰る。其気熾熱不可向云々と。是此湯の事なるべし。

西遊雑記（古川古松軒・天明三（一七八三）年）

湯の岳、鶴見が嶽と称する山は當国第一の高山にて、鶴見が嶽は天気不勝節は、燃へて煙たつなり。麓にかんなわ村といふあり。此処に地獄と称せる所数多にて、紺屋の地獄といふは、湯わく所藍色也。油やの地獄、酒屋の地ごく、いろいろさまざまの、地獄と名づけし池ありて血の池といふは、湯のいろ赤し。中にも池の地獄と称せるは広々とせし池のうち鼎にて湯をわかす如く、湯の湧事二尺も三尺も立ちあがる事

にて、見物のものあやまりて手足にそゞげば、忽ちやけどし疵く事なり。土人この池に菜葉をうでゝ食事とせるなり。

菡海漁談（脇蘭室・寛政七（一七九五）年）

鶴見山は海岸を距こと一里ばかり、（中略）

山下には温泉所在に出るなり。中にも南鉄輪村には、欝蒸の気を蔵め包み、材を構へ草土を覆ひて窟の如くし、藁を布き石を枕とし、疾痛ある者偃臥して此気に蒸すに、其快く験を得こと多しとなり。此里には地獄と称する沸熱の泉甚多く、或は人家の壁柱の根などにも煙を出す所あり。菜蔬を煮、麻苧を蒸などの用に供して便利なり。偶来り観る者は、殊に驚怖する事にて、地獄原と云は道路狭くして、左右に方五六尺十二丈の熱泉数十、各泥を躍し、湯を起し、脚下に響て煙気臭悪なること鼻を穿つが如し。隣近の地往々湯あり。海地獄、紺屋地獄、鬼山地獄、園内坊など称するもの甚だ衆し。

温泉めぐり（蝶亭起友〈水之江弥五郎〉・弘化二（一八四五）年）

湯滝のみなもとなる海じごくを見むとて、僕をともなひて、朝まだきより杖突走らしつゝ、松寿精舎を門前よりふし拝みて、二百歩ばかり行ける道の傍らに、熱泉涌出る事幾処といふを知らず。そが中に紺屋地ごく、坊主地ごくの名あり。ここらすべてぢごく原といふとかや。

それより羊腸の岨みちをたどる事やゝ久しうして、海じごくあり。煙朦朧とたちのぼり、湯玉のわき上がる音おどろおどろとすざまし。すざましといふも愚なり。

我も僕も只ほとけの御名を唱ふるのみぞ力くさなりける。五七五はさらなり、三十一もじにも意あまり侍れば、仮名の詩もて思ひをのぶる。

蓼食う虫も己れがすきずき。海じごくにも魚の住みけり。いづくも同じ六ツの衢ぞ、ただたのむなり仏の御国。

けふはあが為にはおもき精進日なれば、仏前に念誦して早々枕につく。

《別府市誌（昭和八年版）より》

海地獄

別府諸地獄中最も壮大なるものにして、市の西北約一里半の位置に在り。廣さ約八十坪の一大熱湯地は何人も一驚を喫すべき偉観なり。中にも熱湯地は、沸々として湧き、白煙朦々遠く数里の外より望見し得べし。此の勝地は大正九年十一月七日、皇太子裕仁親王殿下の台臨を辱うし、又大正十二年五

月二十二日、久邇宮良子女王殿下の玉蹤を印せられたる所なり。（別府市誌・昭和八年）

坊主地獄

海地獄の西方六町に在り。灰色の熱泥、大小の球形を成して沸騰し、白煙を揚ぐる光景凄壯を極む。是坊主地獄の稱ある所以なり。此の地獄亦皇太子裕仁親王殿下並に久邇宮良子女王殿下の台覽を辱うす。又促成栽培の溫室等あり。（別府市誌・昭和八年）

鐵輪地獄

別府の西北一里半、速見郡朝日村鐵輪郵便局の前に在り。百尺の地底より噴騰する熱氣溫泉は、囂々たる音響を伴ひ、凄惨を極む。近来此の熱氣溫泉を應用して、ラジウム蒸氣吸入、トルコ式蒸風呂、乾式溫浴場、蒸氣奄法浴場等を設け、患者治痾の用に供しつゝあり、又和洋兩式の休憩室、圖書閲覽室等を設けて、浴客の慰安方法を講ぜり。（別府市誌・昭和八年）

地獄めぐり

地獄見学には前述の如く、江戸時代に多くの見学者が訪れた。この地獄めぐりを観光として発展させたのは油屋熊八であった。大正九（一九二〇）年一一月、特別大演習が中津平野を中心に行われ、統監された摂政宮裕仁親王殿下が海地獄・坊主地獄・地の池地獄を見学されることになり、地獄めぐり循環道が建設された。昭和三（一九二八）年、油屋熊八が二五人乗りバス四台で亀の井自動車を設立し、地獄めぐり遊覧バスを運行した。バスガイドの七五調の説明で別府観光を有名にしたが、当初は鶴見地獄・海地獄・坊主地獄・地の池地獄・龍巻地獄をめぐったという。

別府温泉地獄めぐり（前項の地獄めぐりの名勝解説指針より抜粋）

○鉄輪遠望

遥か正面の稍右に、人家の続くあの丘は、年十万の浴客を、迎えて送る鉄輪の、温泉場でございます。

○鉄輪温泉

次の鉄輪温泉は、六百五十年前の、昔一遍上人が、八町四面の地獄をば、衆生の為に埋立てて、熱の湯・蒸湯を築き又、

時宗の一派を開かれし、由緒ある地でございます。

○鬼山地獄

之より上の一帯は、昔の爆裂火口跡、そこの鬼山地獄から、湯を噴く力の猛烈さ、その湯の色の美しさ、稀な見ものでございます。

○十万地獄

すぐその上は昔より、十万地獄と呼び伝え、色様々の熱泥が、沸き立つさまは趣味のある、研究資料と申します。

○新坊主地獄

次は眺望第一の、名のある地獄新坊主、熱泥絶えず渦を巻き、地獄地帯に珍しい、見ものの一つでございます。

○海地獄

又其の右は海地獄、緑滴る絶壁を、背景とせる谷あいに、深く湛えし熱湯は、色紺碧の海に似て、その物凄き美しさ、嘗て今生陛下には、まだ東宮におわす時、其処に台臨あそばせし、別府名所でございます。

国指定名勝

海地獄・白池地獄は血の池地獄・龍巻地獄と共に国指定名勝に登録されている。

海地獄は、新別府の別荘地に引湯するため買ったといわれている。

白池地獄も温泉付き分譲宅地開発が目的だったというが、前項の定期観光バスによる地獄めぐりが盛んになり白池地獄を開設したという。

地獄めぐりの観光化が各地獄の施設整備につながったことは事実であろう。

現在の地獄めぐりの案内を資料として付けておきます。

鉄輪蒸窖及両温泉分析並医治効用

明治二十一年出版

緒言

本村温泉及び蒸窖の諸病に奇効を奏するは世人の普く知所にして、我豊後の国速見郡温泉の多き古より蒸窖の設けあるものは獨本村あるのみ。他の温泉も亦往々本村に象とり蒸窖を造築するも一も其性効本村に髣髴する能はさるを以て今皆廃業に属したり。仰々本村蒸窖及び温泉の濫觴を尋するに、遊行一遍上人紀州熊野権現の霊夢を蒙むり、建治三年の秋大乗経文を書写したる一字一石を以て鉄輪地獄を埋め、以て此の蒸窖を創築せられたること遊行派温泉山松寿寺の縁記に詳記する所なり。其造築を略記するに、窖の中央に一大石柱を建て柱の周囲に枕石十六箇を置き、以て十六人を臥しむへし。十六處所在に随て各其名称を異にす。所謂痰焼の如きは痰症の病人をして其痰喘を焼除し根治せしむるの義に取るか如し。凡そ窖口より入り石柱を繞りて輪次右旋し終て窖を出るを以て一周とす。一人一處に臥こと凡そ一〔ミニユート（ミニッツ）〕弱とす。十六人にて凡そ六十〔ミニユート〕なれは一昼夜即ち四周とす。浴客多き時は己むを得ず其時間を短縮せさるを得ず。其窖中に在るや蒸気の温熱を以て其出る比には全身洗汗淋漓たり。一周の後窖を出て直ちに所謂七瀑に至りて、其患部を搏擊し終りて渋の湯に浴し、然る後又熱の湯に浴するを以て順序とす。渋の湯は寒暖晴雨に因て其湯色を変す亦奇と謂うへし。熱の湯は身熱を除去するの謂なり。古之を兎狩湯と称す。中古以来熱の湯と改称す。七瀑及諸泉亦皆上人の造築に係る。瀑側に上人の袈裟掛・衣掛二石今に至て尚存す。本村もと鹿直村と称す。上人温泉築造の時より今名に改ると云。其諸泉成分及医治効用の如きは左表に詳かなり。此れ曩に其筋に於て其成績を検査せられ以て浴客の参考に便す。其蒸窖成分の如きは泉源深く窖底に在て以て分析検査に由なし。然とも地底沸騰の原質中含有する所の純粋精微の諸成分蒸気となりて窖中に滲漏し病毒を発散するの効は、他の直接入浴温泉の諸成分水質中に混在する者の比に非ざるを知へし。故に蒸窖に於ては特に古来俗間傳称経験の効果を揚るのみ。

★蒸窖古来伝承の経験効能

一、癪筋肉の痛む病　一、手足屈みたる病　一、身体中潜伏の悪熱を発散
一、痰気喘息の病は窖中痰焼の箇所に就て蒸混すれば必ず全治す　一、瘧症
癲癇発搐の病　一、手足麻痺の病。

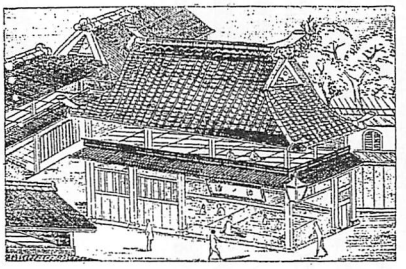
★渋の湯

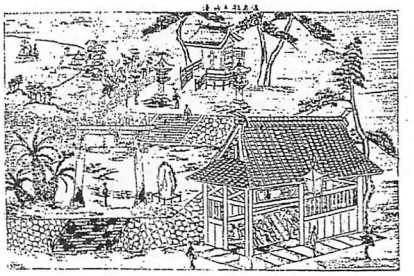
◎俗間伝承の効能
軽症梅毒・痛風・瘰癧・筋肉の痛・帯下症・疥癬及び遺毒で発表し浴するに随て漸々治癒す。本泉は溜飲胃痛総て脾胃の弱き人は服用すべからず。
◎医治効用
神経機能の亢進・神経麻痺・婦人生殖器の慢性諸病・貧血・重病後の快復期・腺病・膀胱及び腎臓慢性炎・疝痛・頑癖等に適応す。

★熱の湯

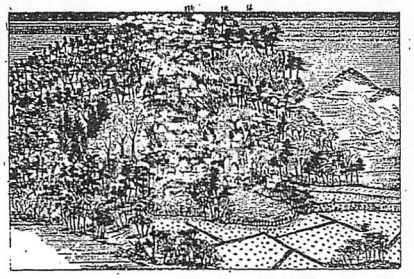
蒸窖より出て七つ滝に浴し、然る後渋の湯・熱の湯に浴すれば本泉は至て澄明清潔にして身体の垢汗を去り体気頗る爽快なるを覚ふ。
◎医法効用
慢性筋及び関節リュウマチ・痛風・炎症後の滲出物・神経機能の亢進・神経麻痺・婦人生殖器の慢性諸病・貧血・重病後の快復期・腺病・膀胱及び腎臓慢性炎・疝痛・頑癖等に適応す。

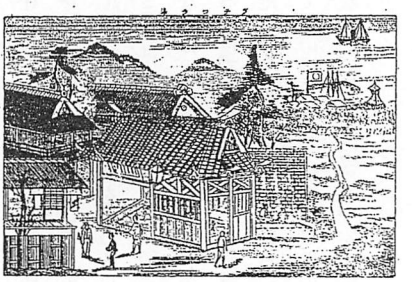
（文責　市文化財調査員　入江秀利先生）



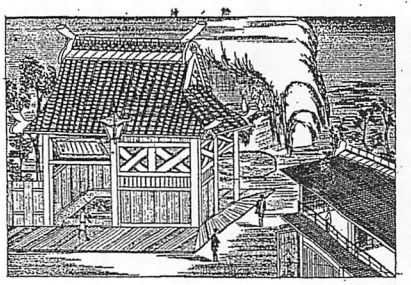


渋の湯（今までの元湯）

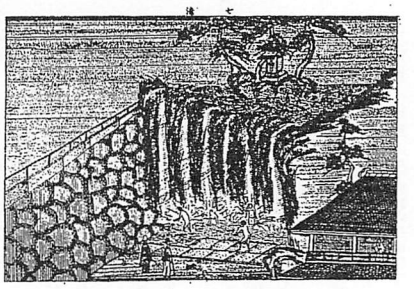




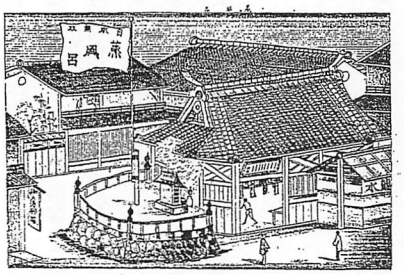
タテワラ湯



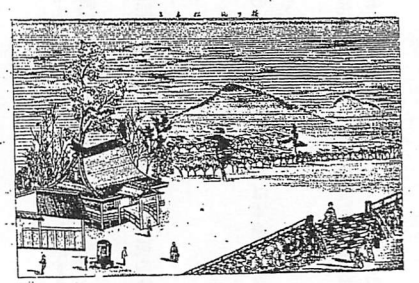
熱の湯



七　滝



蒸し湯



国立国会図書館 近代デジタルライブラリーより
発行者　川崎幾三郎（明治21年印刷）

鉄輪の地名

河直山＝『豊後風土記』（奈良時代）

鶴見加納＝『豊後国図田帳』（弘安八（一二八五）年）

南鉄輪・北鉄輪＝『豊後国志』（享和三（一八〇三）年）

鉄輪（かなわ）＝時宗の踊り念仏・六斉念仏の演目

鹿直村＝『鉄輪蒸窖及両温泉分析並医治効果』

「本村もと鹿直（かのう）村と称す。上人温泉築造の時より今名に改むると云。」

温泉地としての開発

建治二（一二七六）年（建治三年説（『別府史談』十一号「時宗寺院松寿庵について」小泊立矢氏）、時宗の開祖一遍上人が地の神の怒りを鎮めて、蒸し風呂を造ったという。渋の湯・熱の湯もその時に開設されたと伝えられる。

「温泉山松寿庵由緒書」（明治十八（一八八五）年十月二十九日付・廃庵再興願添付書）などによると、海部大分両郡を教化し尚速見国東の郡の教化のため横灘野口の里に来て北に進もうとしたが、朝霧が深く一歩も進むことができなかった。そこに老翁が現れて鶴見岳の朝霧と鉄輪地獄の噴気が混じってこのように煙っているのだと告げた。この鉄輪地獄を埋めて往来の人を助けようと三、七（二十一日）の間祈願した。これを鎮めるには人力では無理で法徳によらなければならないとのお告げを受け、大乗経（大蔵経）を石に書写し地獄に埋めたという。上人に帰依した大友三代頼泰は一寺を建立した。上人は温泉と幼名松寿丸に因んで「温泉山松寿寺」と名付けたという。

いずれにしても、鎌倉時代末期には湯治場として知られていた。

蒸し湯＝一遍上人が出身地瀬戸内地方で盛んであった石風呂の入浴方法を、温泉噴気を利用して造ったと伝えられる。石室内の床に薬草の石菖（清流のふちに群生、鎮痛・健胃などの薬効がある）を敷き詰めて床下から噴気で熱す。

地獄の項と重なるが、豊国紀行には「熱湯の上にかまえたる風呂あり。病人是に入りて乾浴す。」とあり、菡海漁談には「南鉄輪村には、欝蒸の気を蔵め包み、材を構へ草土を覆いて窟の如くし、藁を布き石を枕とし、疾痛ある者偃臥して此気に蒸すに、甚快く験を得こと多しなり。」と記され

ている。

江戸時代には二十四文徴収し石風呂の湯屋や庵寺営繕費に充てた。（延享五（一七四八）年、時宗総本山・清浄光寺に松寿庵の「末寺願」を提出した文書）

昭和の末には百五十円、その後二百八十円、平成十八（二〇〇六）年、隣地に新蒸湯を建築し雰囲気は一変した。また、入浴料は五〇〇円となった。新蒸し湯敷地内に無料の足蒸し湯が併設されている。

渋の湯＝　一遍上人開設と伝える。元は蒸し湯に隣接していた元湯であるという。俗に有命（いさ）湯という。お湯に生命でもあるように湯色が一定せず、ある時は白く、また灰白色に、藍色に、時には紺色に変じたという。

現在の渋の湯は温泉山永福寺下にあり、裏には境内から流れ落ちる滝湯跡がある。その崖には日光月光両菩薩の磨崖仏と太陽を表す円と三日月が彫られている。かつては滝に打たれる人で大混雑をしていたという。

熱の湯＝　一遍上人開設と伝える。当初浴舎はなかったという。一名「浮の湯」また「怒の湯」ともいう。また「金の湯」とも称している。『鉄輪蒸窖及両温泉分析並医療効果』には、「熱の湯は身熱を除去するの謂なり。古之を兎狩湯（うかりゆ）と称す。中古以来熱の湯と改称す。」とある。この近辺の小字名はウカリユである。ちなみに蒸し湯近辺は風呂本であり、多くの温泉地にある湯元ではない。石風呂からか。

現在の熱の湯は、大変熱いので有名であるが、かつては熱を取る湯であったという。また、数少なくなった無料開放温泉である。

鉄輪の温泉　現在の鉄輪地区の共同温泉の紹介。

市営無料温泉　熱の湯

市営有料温泉　蒸し湯

区営組合営温泉　渋の湯・筋湯・上人湯・地獄原温泉・谷の湯・砂原温泉

私有私営温泉　ひょうたん温泉・鬼石の湯・夢たまて筥・やまなみの湯・その他旅館及びホテルの

立ち寄り湯

組合員のみの温泉（一般利用不可）

大師温泉・湯の川温泉

地獄蒸し料理・地獄釜

地獄蒸し料理は伝統料理となっているが、菌海漁談には「此里には地獄と称する沸熱の泉甚多く、或は人家の壁柱の根などにも煙を出す所あり。菜疏を煮、麻苧を蒸などの用に供して便利なり。」と記している。

また隣村の鶴見村についての記録『鶴見七湯栖記』（伊嶋重枝（直江雄八郎）弘化二（一八四五）年）には、地獄蒸し料理が紹介されている。それには、「きぬかつぎ（はじきいも）」＝里芋の小芋、「蒸し琉球芋（八里半）」、「行成餅」＝ほどよく練った小麦粉で琉球芋を包み蒸す。すぐできるのでイキナリ餅か、「地獄蒸し軽羹」＝山芋・うる粉・砂糖、「地獄蒸し椿餅」＝葛粉・餅粉・砂糖・醤油、蒸しあがった後その下に椿の葉をつける。「赤飯また年の暮れの餅など、みなかくのごとく蒸し立つる事なり」と地獄蒸し料理がつくられていたことが知られる。

最近では地獄蒸しプリンが各施設でつくられ名物になってきた。地獄蒸し豚まんも定着している。

鉄輪では、旅館や貸間また各温泉施設や食堂に地獄釜が設けられており、気軽に地獄蒸し料理が楽しめる。鉄輪中心部に「地獄蒸し工房　鉄輪」が開設され、休日や好天気の日には多くの観光客が「地獄釜」の順番待ちをし、地獄蒸し料理を楽しんでいる。

また最近、低温蒸しの料理方法が研究され新しい名物になりつつある

かしま（貸間）

部屋だけ貸して宿泊客が自分で賄いをする宿泊施設であり、長期滞在客が多い。客は「地獄釜」で料理を作り、各温泉に入湯する。一時期は大変多かったが、最近は食事付きを希望する人が多くなり、旅館・民宿を兼業するようになっている。

旅館

江戸時代からの旅館は八軒あったといわれるが、旅館業としての建造物は姿を消した。富士屋旅館が「国登録有形文化財」として明治時代の建築物を残している。現在は「富

士屋ギャラリー　一也百（はなやもも）」としてリニューアルされている。

鉄輪中心部の旅館は一部を除き小規模が多い。大規模ホテルは九州横断道路沿いに建っている。

温泉山永福寺

鉄輪地区の史跡・歴史・伝承では、温泉山永福寺に触れなければならない。この寺はもと「温泉山松寿庵」と称し、一遍上人開基と伝えられている。

前述のように、建治三（一二七七）年、一遍上人が鉄輪を開いた時、松寿庵寺を残したと云う。その後、応永元（一三九四）年に鉄輪松寿庵が再興されたという。江戸時代には、延享五（一七四八）年二月九日付で時宗総本山・清浄光寺に「末寺願」が提出され、宝暦六（一七五六）年住職が派遣された。その後、明治四（一八七一）年住職の死亡の届け出がなく、廃寺扱いとなった。明治十八（一八八五）年「廃庵再興願」を県に提出し、その時、「温泉山松寿庵由緒書」を添付している。六年後の明治二十四（一八九一）年、永福寺の寺号を借りて「温泉山永福寺」として再興された。

末寺願の中に「一遍上人様が御自作像を造立された。村中の尊崇を集め、（一遍忌日）の八月二十三日に御法事を仕り」とあるが、現在は、秋の彼岸にその自作と伝えられる一遍上人像を湯あみさせる「湯あみ祭り」として法事を再興している。

「温泉山松寿庵由緒書」を載せておきます。

人王十二代後宇多帝御宇建治二年丙子年秋、時宗祖一遍上人念仏勧進ノ為豊後国ニ渡来シ、海部・大分両郡ヲ教化シ尚速見・国東郡ノ教化ノ為横灘野口ノ里ニ来リ、尚北ニ進マント欲シ玉フニ道路相分カラズ、故ニ徨居リ玉フ所ニ老翁一人現レ告テ曰ク、道路ノ明カナラサルハ鶴見嶽ノ朝露ト鉄輪地獄ノ焔烟ト一団円トナリ、毎朝如此、彼ノ群山ニ突出シタルハ鶴見カ嶽ニテ紀州熊野太神ノ影向ノ地ナリ、麓ニ社アリ、其左ニ焔烟ノ立登ルハ鉄輪地獄ノ焔烟ナリ、言終テ翁消失セリ、上人以為ラク、彼ノ鉄輪地獄ヲ埋メテ往来人ヲ助ケン、且彼翁ハ熊野太神ナラン　ト、彼ノ社ニ詣テ三七之間鉄輪地獄填埋セン事ヲ祈願シ玉フニ太神告ケ玉ハク、鉄輪地獄ヲ埋メン事人力ノ及フ処ニ非ズ、法徳ニ非ズンバ難シ、故に大乗経ヲ石ニ書写シ填埋セバ如何ナル

焔烟、動々タル数十仞ノ鉄輪地獄モ必ズ鎮マルベシト、上人告ノ如ク成シ玉フニ、僅カニ一間四方ニ全リ如何ヨウ成シ玉フモ湯気止マラズ、斯ニ於テ亦太神ニ祈願アリシカハ示シテ曰ク、三間四方湯気止マラザルハ之ハ是レ法徳ノ然ラ令ヘキ者ニシテ、今ハ毒熱湯相変シ良薬ト成レル者ナレハ、此ノ湯気ニ触レル者ハ日来ノ疲ヲ休ム而已ナラス諸病悉皆消除セント、斯ハ此レ蒸湯開闢之元因ナリ、此時兵庫頭大友泰頼（頼泰）入道、上人深ク帰依シ一宇ヲ建築シ奉リ上人ニ寺号ヲ請フ、上人温泉ト幼名松寿丸ヲ象リテ温泉山松寿寺ト名称シ玉ヘリ、斯ニ於テ温泉守護末代衆生結縁ノ為メ手ツ柄自像ヲ彫シテ置キ玉ヘリ、又堂前ニ六七寸之楠アリ、爪ニテ弥陀六字ノ名号ヲ切付誓テ曰ク、我称名勧進之旨趣不違仏意不背神虜者期樹次第繁茂迄末代、随テ巨大也ト、果シテ誓ノ如ク三百有余年ヲ歴テ楠七抱余ニ到レリ、故ニ名号ノ肉体モ従テ巨大ト成レリ、寺門モ亦繁茂ニ成リシカ、其頃大友義鎮公後チ宗麟ト云フ、耶蘇教ヲ信仰シ国内神社仏閣ヲ多分廃壊セリ、松寿寺復タ此ノ難ニ罹リ寺門ヲ廃スト雖モ、村民蒸湯開闢ノ洪恩ヲ思ヒ、草庵ヲ結ビ上人ノ遺像ニ仕ヘリ、而シテ百六十余年ヲ過ギ宝暦年間ニ至リ、時宗総本山相模国藤沢山清浄光寺ニ直轄鉄輪村内ヨリ願立シ処、本山ヨリハ淳盈和尚ヲ住職ニ下セリ、併シヨリ十二代専秀和尚マテ連綿相続セシ処、明治四辛未年十一月廿三日恵秀和尚死亡セシ後、住職撰定中無住無檀寺院廃止之御成規ニ触レ廃セラレ候云々

右の由緒書聊カ相違無之候也

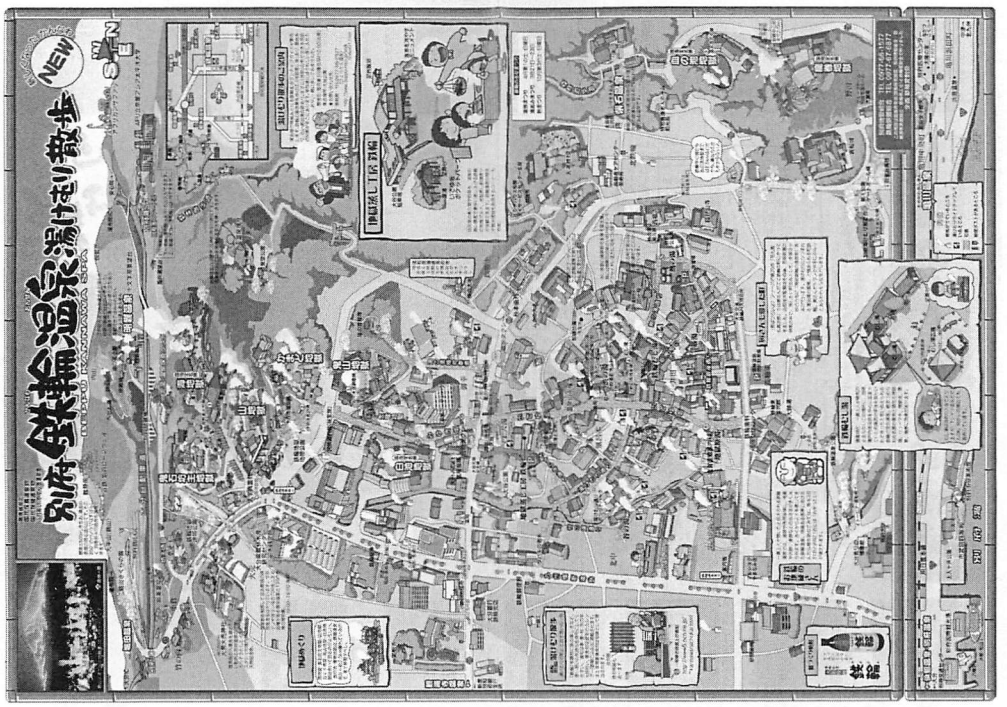
再建擔当人

河野智元

湯けむり景観

鉄輪といえば湯けむりというイメージが定着している。昔は共同浴場の周辺に宿泊施設が設けられていたが、内湯が当然となり各旅館や貸間は地獄・温泉を備え各施設から湯けむりが立ち上っている。休日や休前日は、夜間ライトアップなどをしている。

残したい風景に選ばれたりして有名になった。その景観を見るために「湯けむり展望台」が鉄輪の東の高台に設けられた。扇山火まつりの撮影地として、当日はカメラが林立している。湯けむり景観を残すために鉄輪中心地は建築制限などを受けている。

現在、市では国指定の「文化的景観」（文化財保護法で定められた文化財の一種で、人々の生活や生業といった日々の営みと、風土によって形作られた景勝地）の選定を受けようとしている。その第一期として、鉄輪地区と明礬地区を選んでいる。（パンフレット参照）

※なお、平成二十四年九月十九日付けで「別府の湯けむり温泉地景観」として「重要文化的景観」に選定されました。